

ニンニク ユリ科 原産地：中央アジア 学名：Allium sativum L.
 ニンニク (マルチ)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作 型												
主な作業	<p style="text-align: center;"> 収 植 穫 え 付 け </p>											

技術体系

1 作型の特徴

一般に、秋の冷涼な時期に植え付け、梅雨前までに収穫する。

また、ニンニクは、貯蔵が比較的簡単で、品種による貯蔵性の差も少ないため、作型の分化はほとんどない。

2 適応地域

平坦地域

3 栽培条件

(1) 温度

種子となる鱗片の萌芽は地温22～23℃で始まる。低温ではかなり低くても発芽するが、30℃以上になると揃いが悪くなる。茎葉の生育適温は15～20℃であり、寒さには比較的強いが、暑さには弱く25℃以上になると茎葉の生育が弱まる。

(2) 土壌

土壌への適応範囲は広いが、肥沃で保水性の良いことが、良品生産のために大切である。春先乾燥しやすい土壌では、葉枯れなどの生理障害が発生し、球の肥大が悪い。土壌酸度はpH6.0～6.5が適当で、酸性が強まるほど生育は劣る。

4 経営目標 (福岡県)

- (1) 収 量 0.8 t / 10 a
- (2) 投下労働時間 410時間 / 10 a
- (3) 所得率 35%
- (4) 経営規模 40 a
 (家族労働力2人の場合)

栽培技術

1 品種と特性

「嘉定種」

生育は旺盛で、耐寒性は強い。鱗片数は7～8片と少ないが、外皮は白く、品質良好で50 g以上の大球となる。ただし、裂球しやすいので収穫適期を過ぎないようにする。

2 種球の準備

10 a 当たり120～150 k g の種球を準備する。種球は病害虫におかされていない直径4 c m以上の大球を使用する。鱗片を1片ずつ切り離した後、5 g 以上のものを種として用いる。

3 本圃の準備

保水・排水性が良く、作土が深い圃場を選定する。

(1) 施肥

施肥は全量基肥とし、成畦後黒マルチを被覆する。植え付け1週間前までには完了させておく。

施肥量 (k g / 10a)

	N	P ₂ O	K ₂ O	備 考
基肥	20.0	25.0	20.0	堆肥2 t
合計	20.0	25.0	20.0	苦土石灰

施肥量は土壌診断結果に応じて調整する。

(2) 栽植様式

畦幅130 c m、条間25 c m、株間15 c m、4条植とするが、土寄せ等を行うため畦間の通路を広めにとる (区画として幅180 c m程度)。

4 植え付け

9月下旬～10月上旬に鱗片の頂部をまっすぐ上に向けて、5～7cmの深さに植え付ける。植え付けが浅いと裂球しやすく、深いと萌芽が遅れ生育が悪くなるので注意する。

5 管理

(1) 除けつ

11月下旬の草丈が10～15cmの頃、1カ所から2芽以上でたものは、株もとからかきとり1芽とする。これを放置すると球の肥大が悪くなる。

(2) 摘蕾

4月下旬から抽苔するので、「とう」を摘み取る。タイミングは花茎が垂れ下がり始めた時であり、早すぎると分球しやすく、遅れると肥大が悪くなる。

6 収穫

収穫適期は、茎葉の30～50%が黄変し、茎盤部と鱗片の尻部がほぼ水平になったころである。収穫は晴天日に行い、2～3日圃場で天日乾燥させる。

7 乾燥

乾燥は一般には自然乾燥を行う。10～15cm残した茎を数株束ねて、雨の当たらない風通しの良いところにつるす。(ただし、梅雨期は外気にさらされない場所に移す。)もしくは、茎を短く切り、ビニルハウスの中で浅い箱に球を重ねないように並べて乾かす。乾燥は、生球の重量が30%程度減少するまで行う。

乾燥は35℃強制乾燥で7～10日、自然乾燥で30～50日程度を要する。

8 貯蔵

温度・湿度変化の少ない場所で行う。冷蔵施設を利用する場合は、茎を短く切り、温度0～2℃、湿度65～70%で貯蔵する。